



# 運命の9月1日 第1章 襲われた首都圏

—日本史上最大の災害 関東大震災—

千葉県や神奈川県などにも壊滅的な被害をもたらし、東京が廃墟と化した関東大震災は、史上まれにみる災害として記録に残っています。この関東大震災にちなみ、9月1日は「防災の日」と定められました。

その関東大震災から85年が経過した2008年（平成20年）5月、中国四川省では約7万人もの犠牲者を出した「四川大地震」が、そしてその1ヵ月後に日本では「2008年岩手・宮城内陸地震」が発生しました。これらの地震による被災の惨状は、私たちに地震の恐ろしさをあらためて思い知らせました。

このように、地球内部の活動は休むことなく続いており、常に私たちの命や生活を脅かしていることを忘れてはなりません。

関東地震ではなぜ大きな被害が出たのでしょうか？そして被災した人たちは大震災から何を学び、どうやって復興を成し遂げたのでしょうか？そこには、来るべき第2の関東地震に備えて私たちが学ぶべき多くの教訓があるはずです。



## 1. 関東地震で焼け野原となった東京

この地震により、東京では火災が発生し6万人以上の人が焼死しました。

写真提供：国立科学博物館

## 振り切れた地震計

関東大震災調査報告  
臨時委員 中村左衛門太郎  
(前略)

本震ノ東京ニ於ケル発震時ハ  
九月一日午前十一時五十八分四  
十六秒六ニシテ当時余ハ麹町元  
衛町中央気象台本館階上北東隅  
ノ一室ニテ執務中ナリシガ、急  
激ナル振動ヲ感ズルコト数秒ニ  
シテ略南北ノ大ナル振動ノ為メ  
北向キニ並ベタル戸棚ノ転倒ス  
ルヲ目撃セリ。コノトキ座ヲ立  
チテ室ノ中央ニ至リ壁ニ近キ器  
具ノ転倒ヲ避ケタルガ振動大ニ  
シテ歩行スル事能ワズ僅カニ机  
ニ両手ヲ支エテ器物ノ転落ヲ避  
ケテイタリ。コノ時振動少シク  
弱マル事一、二秒ナリシガ更ニ  
東西ニ近キ方向ノ激シキ振動ニ  
ヨリ東面セル戸棚ノ余ガ附近ニ  
転倒スルヲ見タリ。(後略)

## 2. 報告書に記された揺れの状況

関東地震発生時、中央気象台地震係の中村左衛門太郎による報告書の冒頭には、専門家の視点で地震の揺れの様子が詳細に記載されています

「関東大震災調査報告」(中村、1925)より抜粋

それは、大正12年(1923年)9月1日のちょうど皆がお昼の膳につこうかというその時でした。これまで経験したことがないような激しい揺れが突然関東一円を襲いました。

中央気象台に勤務していた地震係中村左衛門太郎は、「関東大震災調査報告」の中で、突然強い揺れが襲ったその数秒後に戸棚が倒れたこと、揺れが大きいために歩くこともままならなかったこと、机に両手を支えて器物が転落するのを避けたことなど、地震発生直後の様子について詳細に記しています。

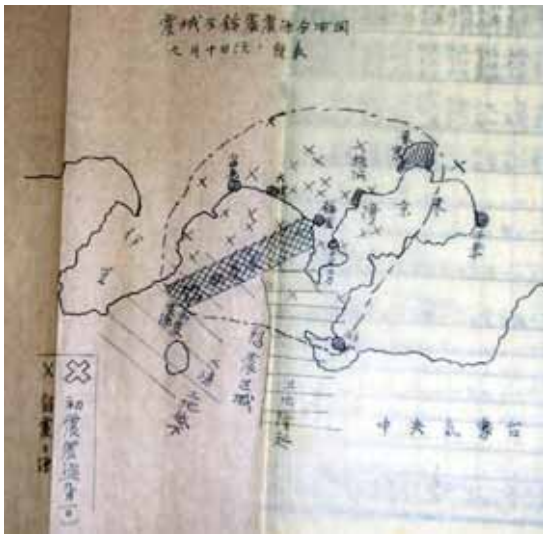
この報告書によれば、中央気象台に設置した5台の地震計は未使用の1台を除き、他4台は破損したり、または転倒したりしたため、いずれも地震の記録を残すことはできませんでした。

この地震の揺れは日本だけではなく世界中を駆け巡りました。しかし振り切れずに最後まで記録できたのは強い揺れでも振り切れないように倍率を低く設定した地震計で、日本では東北、西日本に設置したわずか6台の地震計だけでした。このように、関東地震の揺れは大変激しいものでした。

突然の揺れが東京を襲ったのは午前11時58分46秒、震源で断層が動き始めたのはそれより14秒前の11時58分32秒とされています。そのときの地震の規模はマグニチュード7.9、エネルギーに換算すると阪神・淡路大震災をもたらした「1995年兵庫県南部地震」の約8個分に相当します。しかも、その3分後にはマグニチュード7.2、さらにその2分後にはマグニチュード7.1の余震が起きました。わずか5分の間に、首都圏はマグニチュード7クラスの強い揺れに3回も襲われたのです。

大きな余震はさらに続きました。翌9月2日のお昼頃、勝浦の沖合いを震源とするマグニチュード7.6の、本震にも匹敵する地震が発生しました。さらにその日の夕方には九十九里沖でマグニチュード7.1の地震が発生したのです。

関東大震災が未曾有の災害となった背景には、昼時で火を使っているときに発生したこと、低気圧の影響で強風が吹き荒れていたこと、当時の建物が耐震性や耐火性に乏しかったことなど複合的な要因があげられます。しかし、阪神・淡路大震災に匹敵する、もしくはそれよりも大きなエネルギーをもった余震が、短時間に何回も発生したことが大きな被害を生んだ要因の一つともいわれています。「大正震災志」には、南房総市白浜町や千倉町など外房では、9月1日の地震で潰れかけていた家屋が、翌日に発生した余震によって完全に倒潰したと記されています。



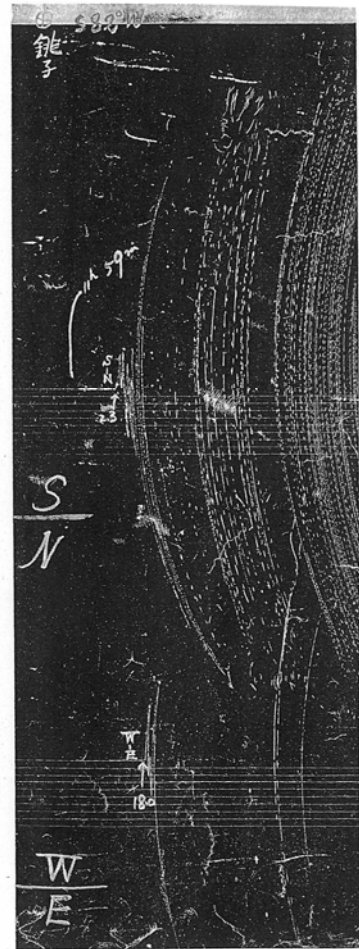
### 3. 地震直後に発表された関東地震の震源域と余震の図

地震発生後10日後に中央気象台が発表した震源と余震図です。地震計が振り切れていたにもかかわらず、震央は現在推定されている震源域にほぼ近い位置に推定されています。

「安房郡震災誌」(北條町、発行年不詳、館山市立博物館蔵)より引用



大正十二年九月一日千葉銚子測候所の簡單微動計記象(倍率百倍)



関東大地震記象

### 4. 関東地震の地震波形

銚子気象台の簡單微動計(固有周期を5秒程度に抑えることによって従来の地震計よりも保守管理が簡単になっている地震計)が記録した関東地震の波形です。揺れの幅が地震計の記録可能な範囲を超えたため、途中で波形が切れています。

「大正大震災の回顧とその復興」(千葉県罹災救護会、1933)口絵より引用

### 5. 関東地震の震源域と余震

現在、推定されている関東地震の震央とその余震の震央、規模を示しています。本震は丹沢付近から破壊が始まり、震源域は房総半島南部に及んだとされています。マグニチュード7以上の余震は、本震発生からわずか5分間に2回、2日間で計5回発生しました。

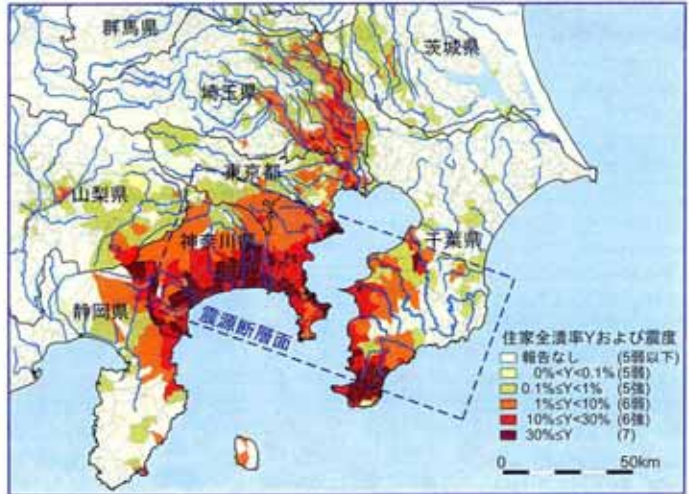
「関東地震の震源域と相模湾周辺の海底地形」(宍倉、2008)、「関東大震災 大東京圏の揺れを知る」(武村、2003)をもとに作図



## 被害の状況

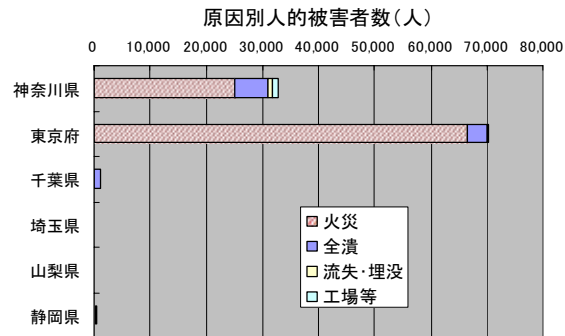
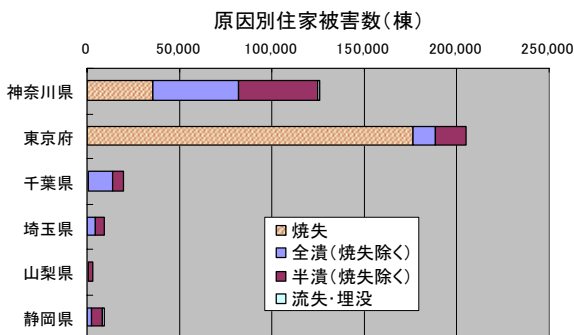
関東地震による災害は、その被害が甚大なことから「関東大震災」と呼ばれています。関東地震による死者数は、全体で10万人を超え、その9割が火災による焼死でした。東京都での火災による被害が大きかったことから一般に東京都で発生した地震といわれることがあります。しかし、震源域は神奈川県から千葉県の房総半島にかけての地域であり、地震による土砂崩れや家屋の倒潰などの被害は東京都よりも千葉県および神奈川県のほうが大きかったです。

千葉県では、房総半島南部の館山市北条、那古地区、南房総市、市原市の養老川沿い、木更津市、富津市のほか、東葛地域の江戸川沿いの低地でも建物の倒潰など被害が集中しました。千葉県での被害の内訳をみると、建物の全半潰により2万棟近い家屋が被災し、死者は1,200人を超えました。さらに津波などによる流失、土砂崩れなどによる埋没、また交通・通信機能も破壊され、被災地は生活の機能がほとんど失われてしまいました。そして被災者は正しい情報を入手できない状況の中、流言（デマ）が飛び交いパニック状態にあったといわれています。



### 6. 関東地方における関東地震の建物被害と推定震度分布

建物被害は震源域に含まれる房総半島南部と神奈川県南部で特に大きく、震度7に相当する強い揺れの範囲が広がっています。「関東大震災 大東京圏の揺れを知る」(武村、2003)より引用



### 7. 関東地震によって被災した各府県の被害内訳

「1923 関東大震災報告書-第1編-」(中央防災会議、2006)をもとに作図

#### 【関東地震被害一覧】

被害の種類		全国	千葉県	
住家被害棟数 (単位:棟)	非焼失	全壊	79,733	13,444
		半壊	79,272	6,030
	焼失	全壊	29,980	323
		半壊	23,501	63
	非損壊	158,872	45	
流失・埋没	1,301	71		
合計		372,659	19,976	
死者・行方不明者数 (単位:人)	住家全壊	11,086	1,255	
	火災	91,781	59	
	流失・埋没	1,013	0	
	工場等の被害	1,505	32	
合計		105,385	1,346	

「1923 関東大震災報告書-第1編-」(中央防災会議、2006)をもとに作成



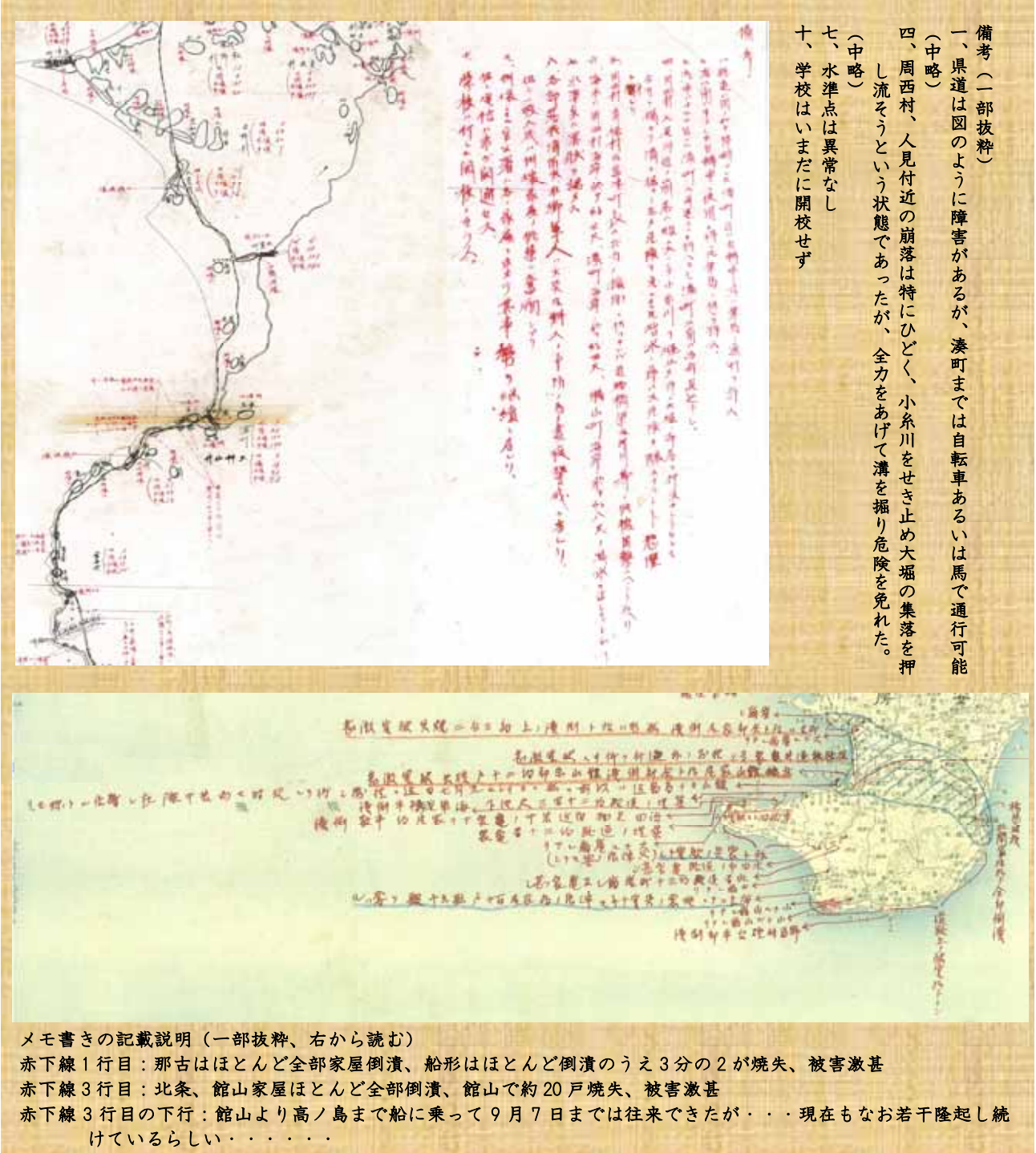
### 8. 千葉県管内震災被害図

震災豫防調査会が作成した被害分布図です。

「1923 年関東大震災報告書 附図」(内閣府中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門委員会、2006)より引用

## 被災地の調査記録

関東大震災が発生した直後、参謀本部陸地測量部（現在の国土交通省国土地理院）は、延べ 94 名の調査員を被災地に動員して 15 日ほどで詳細な被災状況図（震災応急測図）を作成しました。下に千葉県でも特に甚大な被害が出た内房の富津市と鋸南町、および館山市と南房総市の図面の一部を紹介します。これらの図には各地区で倒潰した建物や、土砂崩れ、亀裂、火災の状況が数字で具体的に報告されています。また、被災地での通行止めの様子、学校が閉校になっていること、消防団などによる自警の様子なども記載され臨場感や緊張感が伝わってきます。



備考（一部抜粋）  
 一、県道は図のように障害があるが、湊町までは自転車あるいは馬で通行可能（中略）  
 四、周西村、人見付近の崩落は特にひどく、小系川をせき止め大堀の集落を押し流そうという状態であったが、全力をあげて溝を掘り危険を免れた。  
 （中略）  
 七、水準点は異常なし  
 十、学校はいまだに開校せず

メモ書きの記載説明（一部抜粋、右から読む）

赤下線 1 行目：那古はほとんど全部家屋倒潰、船形はほとんど倒潰のうえ 3 分の 2 が焼失、被害激甚

赤下線 3 行目：北条、館山家屋ほとんど全部倒潰、館山で約 20 戸焼失、被害激甚

赤下線 3 行目の下行：館山より高ノ島まで船に乗って 9 月 7 日までは往来できたが・・・現在もなお若干隆起し続けているらしい・・・

### 9. 内房の被害状況を記録した震災応急測図の一部

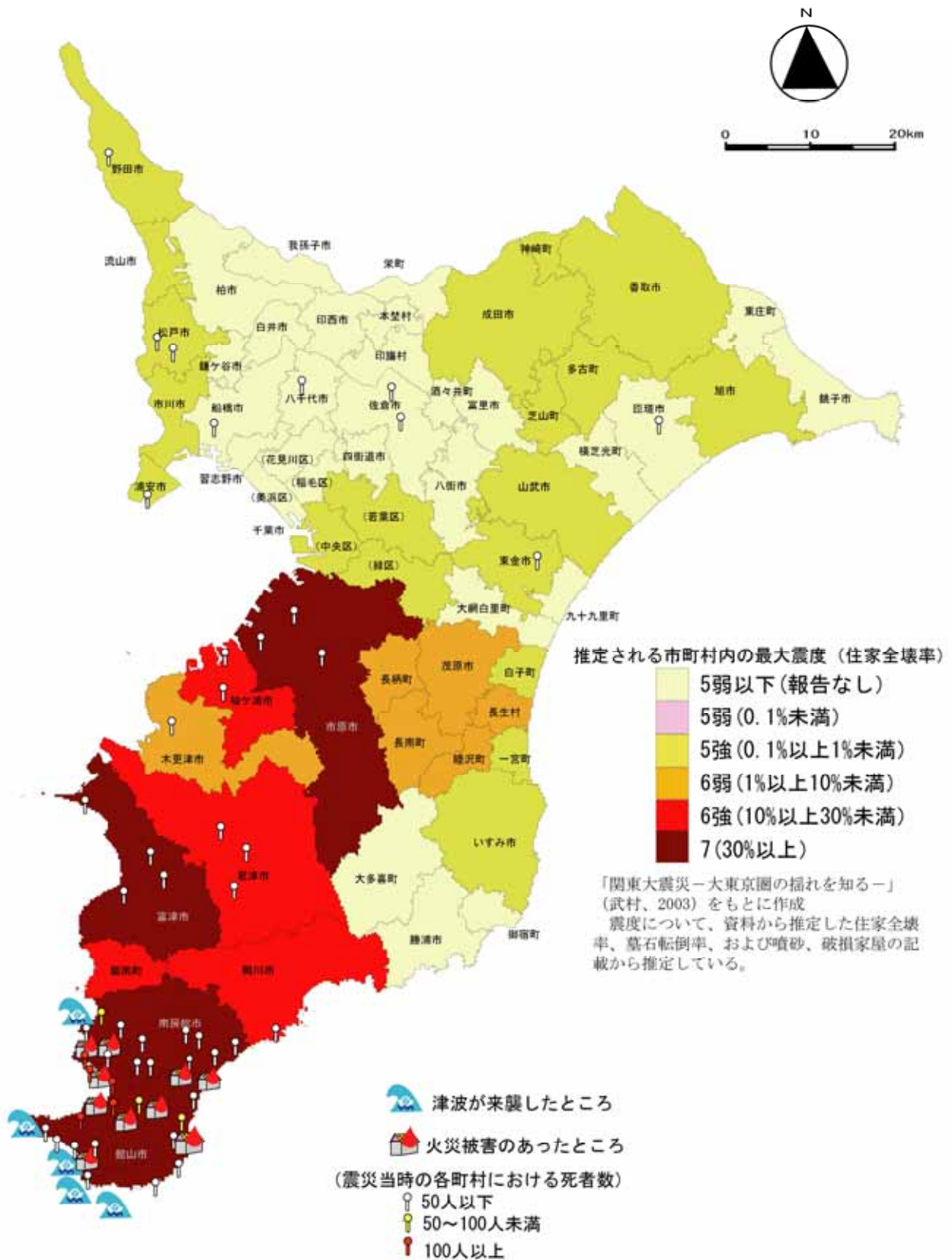
(上) 富津市と鋸南町：当時、東京湾沿岸の地形図は軍事機密のために一般への発行が停止されており秘図として扱われていました。そのため、調査員は秘図から海岸線、主要道路、集落位置を透写して当図を作成しました。

(下) 館山市と南房総市：館山市の被害は特に大きく、船形と北条付近については被害激甚と表現しています。また沿岸部の隆起についても記されています。

「地図にみる関東大震災、一震災直後の調査地図の初公開―」（歴史地震研究会編、2008）

国土地理院地図と測量の科学館企画展示「地図に見る関東大震災」図録（2008.9.9～11.3）より引用





「安房震災誌」（千葉県安房郡役所、1926）、「千葉県地震対策基礎調査報告書」（千葉県、1971）をもとに作成

### 10. 関東地震による千葉県の市町村別最大震度と被害分布

## 元禄地震の教訓が生きた津波被害

安房震災誌によると、関東地震の津波被害について「海嘯襲来の前兆<sup>かいしやう</sup>と思い、海浜に近い住民は先を争って老幼を高所に避難せしめ、壮者は各々家財搬出に努めた」とあります。住民は、関東地震の際、揺れと同時ににわかには海水が引いたのをみてすぐ高台に逃げたということです。安房地域は元禄地震(1703年)の際にも大きな津波被害を受けており、そのときの教訓が代々語り継がれて残っていました。

関東地震における津波の高さは、館山市の相浜地区で9mほどありましたが、そのほかの地区では2m以下でした。被害の状況を見ると、流失した家屋が相浜地区で63戸、布良地区で7戸、洲崎地区で1戸でした。津波の犠牲者は逃げ遅れた老人一人だけだったそうです。元禄地震では千葉県で流失家屋5,000戸以上、津波の犠牲者2,000人以上であったことと比較すると、幸いにも関東地震における千葉県での津波被害は少なかったといえます。津波そのものが小さかったこともありますが、元禄地震の教訓が生かされたのではないのでしょうか？

\*元禄地震については2008年発刊の「防災誌 元禄地震」を参考にしてください。

## 土砂災害と液状化

千葉県で、関東地震による地割れ、土砂崩れ、地すべりなどの土砂災害が発生したのは、館山市、南房総市、市原市、木更津市、君津市、富津市、茂原市、長南町、睦沢町でした。

館山市那古町では、幅30m、高さ40mの崖が崩落し、住家12戸が埋没、即死者3名の被害がありました。

南房総市和田町の白渚でも浅間山の南東斜面が崩落したため、三原川がせき止められ、あふれ出た水で周辺の15,000㎡以上の水田が流失しました。

市原市上原の養老川右岸に位置する浅間山が崩落、川をせき止めましたが、急きょ人工掘削により洪水を免れました。

液状化による被害も千葉県各地でみられました。

液状化被害が最も多く発生したのは、養老川や小櫃川の河口部、館山市の海岸などに広がる沖積低地でした。養老川、小櫃川下流では河口部の三角洲の宅地や水田で噴砂、噴水が発生しました。

館山市では、北条海岸に沿って南北約5kmの陥没地帯が生じ、それに平行した地割れが多数生じました。これらの地割れからは多量の水、砂、泥を噴出したということです。

また、千葉市でも登戸付近、千葉駅付近のほか都川沿岸の埋立地にも液状化が発生しました。登戸では台地上<sup>ちゆうみず</sup>にもかかわらず液状化が発生したのは、関東ローム層中の宙水(地盤の最上位にある粘土層などの上に局所的に溜まった地下水のこと)の存在が原因といわれています。



### 11. 千葉県の土砂災害

土砂災害は、館山市、南房総市、市原市、木更津市、富津市など房総半島を中心に発生しました。

「関東大震災に因る林野被害区域山崩れ地帯概況図と関東地震による土砂災害地点」(内務省社会局、1926)に、地震による土砂災害を追記した(井上・伊藤、2006)をもとに作図

### 12. 液状化による館山市北条海岸の地割れ

液状化によって道路に地割れが発生し、多量の水や砂、泥を噴出しました。

「土木工事震害調査報告」(物部、1926)より引用





## 隆起と沈降

関東地震では、元禄地震（1703年）と同様に、房総半島南部を中心に地殻が変動しました。その変動量は房総半島南部でもっとも大きく1.8m以上隆起したといわれています。房総半島南部では、元禄地震の際にも5mほど隆起しています。南房総市の千倉町や白浜町でも関東地震により土地が約1.5m隆起し、海岸段丘が形成されました。

逆に、国土地理院の前身である参謀本部陸地測量部による測量で市原市、大多喜町、いすみ市の内陸部では局所的に0.4~0.6mほど土地が沈降していることがわかりました。



### 14. 関東地震による隆起で出現した岩礁(南房総市野島崎)

南房総市の太平洋側では、海岸が約1.5m隆起し海岸段丘が作られました。その段丘の陸側には元禄地震の時に隆起して形成された段丘が平行に伸びています。

館山湾の海岸では地震によって土地が隆起し、海岸線が沖に移動しました。震災直後の門倉農商務技師の調査によると、「北条、館山沿岸約6尺、鷹の島（高ノ島）約7尺、沖ノ島約8尺、富崎、西岬約8尺、隆起。鷹の島は陸続きになり、歩いていけるようになった」（館山市史より）と記されています。実際には、昭和22年の地形図に示すように、海岸線が高ノ島につながるくらい伸びています。

現在、沖ノ島と高ノ島は埋立てられ完全に陸続きになっており、海上自衛隊の航空基地として利用されています。



### 13. 関東地震による房総半島の上下変動量

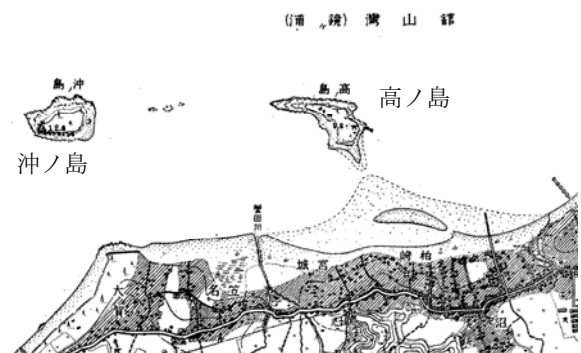
図中に示した白の破線は変動量の等値線、数値は上下変動量（単位はm）を示します。房総半島南端でもっとも大きく隆起し、1.8m以上の隆起量でした。測地結果は陸地測量部（1926）にもとづく。（独）産業技術総合研究所ホームページ <http://unit.aist.go.jp/actfault/seika/h12seika/> および「大正十二年関東震災垂直変動図」（陸地測量部）より引用、加筆



### 15. 現在の沖ノ島と高ノ島



a. 明治前期の館山湾  
参謀本部測量局作成の迅速図を使用



b. 昭和3年の館山湾  
国土地理院発行 1/25,000 旧版地形図「館山」を使用

### 16. 地震によって変化した館山湾の海岸線

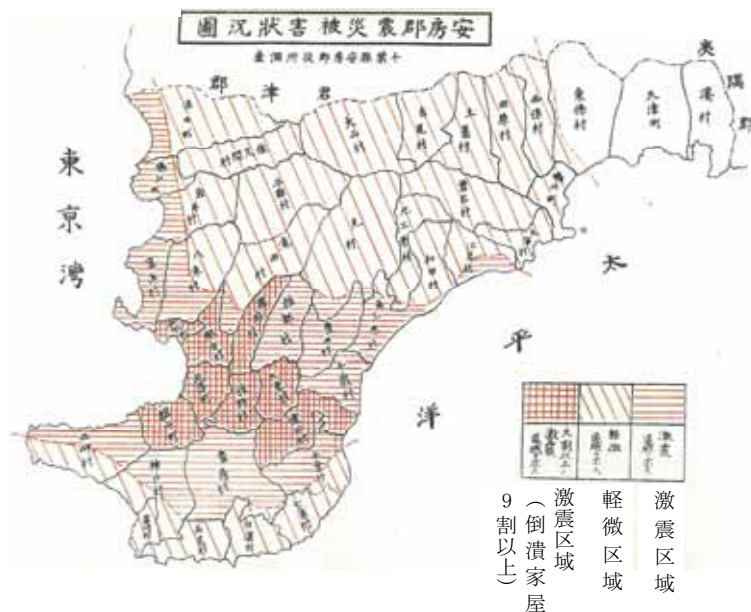
関東地震前の明治前期に参謀本部測量局が作成した迅速図（a）と昭和3年の地形図（b）を比較すると、隆起により海岸線が沖に移動して高ノ島に近くなっています。

## 安房地域の惨状

9月1日の昼、突如として襲った激しい揺れは、安房地域に甚大な被害を及ぼしました。

当時の安房郡管内10町33村のうち、全半壊の難を逃れたのは天津町と湊村の2町村だけでした。

被害が大きかった北條町や館山町<sup>(注1)</sup>では被害戸数の割合が97%を超えました。北條税務署が記した「震災日誌」には「倒潰を免れた建物は税務署、古川銀行、房州銀行の3棟のみ。全町全滅の観を呈している。」とあり、被害の大きさが記されています。



### 18. 安房郡の被災状況

館山町、北條町、那古村(町)、船形町など8町村で建物の倒潰率が9割と特に甚大な被害を受けました。

「安房震災誌」(安房郡役所、1926)より引用、加筆



### 20. 安房震災写真集 (館山市立博物館蔵)

安房地域の被災の状況を写した写真集です。

九月一日(土曜)快晴  
午前十一時五十五分突如激震アリ、在庁署員直ニ屋外ニ避難ス、震動暫時静止スルトテ交互ニ自宅ニ帰り家族ノ安否ヲ確メテ又順次帰署シ監視ス、  
夜間海嘯ノ警報アリ、署員其ノ家族全部高地ニ避難セシメタリ、但シ署員交互ニ庁舎ヲ監視ス  
千葉日報社配達中止 電話不通トナル  
九月二日(日曜)晴  
前日ノ震災ニテ全町全滅ノ観ヲ呈セリ、家屋ノ倒潰ヲ免レタルモノノ税務署、古川銀行、房州銀行ノ三ツノミ、署員全部住宅ヲ失フ、(以下略)

### 17. 北條税務署の「震災日誌」に書かれた震災の様子

津波からの避難、新聞の配達中止、電話の不通、さらに当時の北條町が壊滅状態になった様子が記されています。

「震災日誌」(北條税務署、1923)より抜粋



### 19. 房州銀行 (館山市立博物館蔵)

古川銀行、北條税務署とともに震災から逃れることができた建物です。写真は、平成3年に撮影され、看板が「国民金融公庫」に代わっています。

近代建物調査票 (館山市立博物館、2001)より引用



### 21. 被災者発掘の様子

(館山市立博物館蔵 安房震災写真集より)

がれきの中に埋もれた人たちを探しているところを撮影したものです。

(注1) p9~10 は当時の安房郡の町村名をそのまま使っています。





## 22. 被災写真の位置図

国土地理院発行 1/25000 地形図「館山」を使用



## 23. 那古町の被災状況

(館山市立博物館蔵 安房震災写真集より)



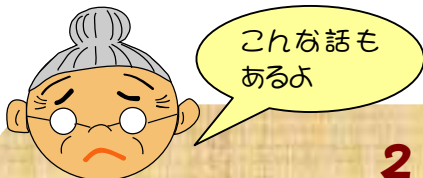
## 24. 北條町の郡役所被災状況

(館山市立博物館蔵 安房震災写真集より)



## 25. 北條駅前通りの被災状況(左)と現在の館山駅(旧北條駅)前通り(右)

(館山市立博物館蔵 安房震災写真集より)



## 2時間で消えた北條小学校

1923年9月1日、北條小学校(館山市)では、夏休みも終わり1,200人余りの生徒が始業式を迎えていました。また、その日は生徒数の増加で慢性的な教室不足を解消するために増築された待望の新校舎の竣工・落成式という特別な日でもあったのです。永年、気がかけていた教室不足にやっと終止符が打たれたことに、町長はじめ関係者には万感の思いで望んだ落成式であったことでしょう。かくして式典は10時半に無事終了、皆新しい校舎への期待と喜びを胸に帰っていったと思われま。しかし、その1時間半後、雷鳴のような轟音とともに襲来した激しい揺れに北條小はあっという間に倒壊したのです。永年の苦労の末やっと手に入れた校舎はわずか2時間で消滅、関係者の落胆はいかほどだったでしょうか。

参考：「続北条小震災悲話」(鈴木、2006)

## 語り継がれる大震災

未曾有の災害となった関東大震災後、日本は1927年（昭和2年）北丹後地震、1948年（昭和23年）福井地震、1995年（平成7年）の阪神・淡路大震災、2004年（平成16年）新潟県中越地震など数多くの地震災害に見舞われました。しかしまだに関東大震災を上回る震災は発生していません。それほど、関東大震災は災害史上まれにみる大災害だったといえましょう。

関東大震災は、その被害の大きさから様々な形で語り継がれています。千葉県でも被災した人たちの体験談、記録写真、そして記念碑が残されています。

### 被災記念碑と大地の傷跡

南房総市本織地区（旧三芳村）では、東西に伸びる農道の南側の水田の面が2mほど低くなっています。この段差は関東地震の際に地表面に現れた断層であるといわれ、延命寺の境内を通っていることから「延命寺断層」と呼ばれています。

延命寺断層は延長約2kmにわたり、最大で2mほどの高低差があるとされています。1972年（昭和47年）、旧三芳村（南房総市）では防災啓発のひとつとして災害の記録を形に残すために、延命寺断層を村の天然記念物として指定しました。



26. 大震災記念  
（南房総市前田 大宮神社）



27. 記念碑  
（南房総市岩糸 貴船神社）

岩糸地区下組では一戸を残すすべて倒潰、仲原台では5人の死傷者が出、27日間にわたり寝食をともにしたと記されています。この石碑は屋敷替えを記念して、故人の霊を弔うために建立しました。



断層で形成された段差

28. 水田にみられる延命寺断層の形跡

農道をはさんで写真左側が2mほど低くなっています。この辺りは、関東地震の際大きな地割れも生じ、小さな池が5つほど生じたそうですが今はその痕跡は見ることができません。



29. 延命寺断層の木碑

木碑には「関東大地震による断層」として記され、その横には直線状の凹地が奥に伸びています。

【活断層】地質学的に最近の時代といわれる新生代第四紀（約200万年前）以降に地震を起こし、今後も活動を継続すると考えられる断層を指します。日本には約2,000の活断層の存在が推定されています。

活断層では地震が過去に繰り返し発生しており、また今後も地震が発生すると考えられているため、活断層の活動度の評価は、そこを震源として発生する地震の予知に役立つと考えられています。

千葉県では、活断層と断定できる地質構造は今のところ確認されていません。

有名な活断層としては濃尾地震で動いた「根尾谷断層」や阪神・淡路大震災で現れた「野島断層」があります。

参考：「地震がわかるQ&A」（文部科学省，2007）



## 恐怖の体験

関東大震災では、被災者による体験談が多く残されています。彼らが残したメッセージをいくつか紹介しましょう。そこには私たちが学ぶべき防災のヒントがあるはずです。

大正12年9月1日この日は館山市民として永久に忘れることのできない大地震の日である。その日は蒸し暑いやや曇り気味の天候であった。午前11時58分45秒この時、この瞬間、不気味な地鳴りとともに、ものすごい上下動がおそった。丁度昼食時だったので、人々は七輪に火を起こしたり、焚き火をして食事の支度をしていた。瞬間、市民は地獄の底に突き落とされた。生まれてから、この方こうした揺れ方に接したことのない人々は夢中でそとに飛び出した。壁は崩れ落ち、屋根瓦はとび、電柱は倒れ、地割れは各所に生じ、大音響とともに各家屋は一瞬にして全潰してしまった。下敷きとなって圧死するもの、傷ついて呻くもの、地上に出ても這いずり回るもの、阿鼻叫喚(あびきょうかん)(悲惨な状況に陥り、混乱して泣き叫ぶこと)の生き地獄の有り様を呈した。船形方面や長須賀方面に火災は起きるし、海岸一帯は隆起するし、残暑のため未だ海水浴客も滞在していたので、その混乱は言語に絶した。

「館山市史 別冊」(館山市史編纂委員会、1973)より抜粋

この体験談から、地震の揺れが体験したこともないような強烈な揺れだったこと、地震発生時の大変な混乱状態が記されています。そして、海岸線の隆起、地割れ、家屋の倒潰の様子についてもこれ以上表現しようがないと思える文章で記されています。



30. 大正震災記録  
(館山市立博物館蔵)

かくしてまるでこの世は終わるかと思うような、最後の審判の日の襲来とさえ思われた。揺り返りが追いかけて追いかけて来る。それがまた路上で歩行ができぬほどの猛烈さであった。なんとか最初の一揺れで助かった小さな番小屋類に至るまで、倒潰の厄を免れることができなかった。瓦は落ちるだけ落ち、建物は倒れるだけ倒れた。土煙が幾分おさまりかけたかと思うと、「海嘯(津波)が来るぞ」との噂が町中を駆け巡り、人々は慌てて親は子を抱き、子は親を助け、或は山に、或は広場にと思い思いに避難した。(後略)

「大正震災記録」(佐野松太郎、発行年 不詳)より抜粋

猛烈な揺れは何度も何度も襲い歩くこともできない様子が伝わってきます。次々と倒潰する建物、舞い上がる土煙、津波襲来の噂に逃げ惑う人々など、まさに修羅場と化した状況が浮かんできます。

9月1日

本日始業式の後の授業が2時間ほどで終わり、大掃除の後の職員会議中である午前11時50分前後、未曾有の強震があった。一同校庭に逃げ出したけれどもまっすぐ立っていられなかったり、腹ばいになったり、飛んだりもした。新校舎は意外にも震動しなかったけれども、講堂や第二校舎は今にも倒れて潰れそうであった。(中略)遠くや近くから泣き叫ぶ声が聞こえてきた、誰かが、津波によって多くの家屋が流されたと云っている。潮が引いて布良港の水はほとんどない。大津波が来るだろうと付近一帯の人たちは生きた心地もしなかった。ふとみると、北のほうで黒煙がもうもうと立ち上っている。さては大山(伊豆大島のこと)が爆発したのかと怪しまれる。(後略)

9月2日

午前11時半ごろ又も強震があった。本日も絶えず揺れている。渡辺校長は日直をするとともに徹夜で警戒にあたる。昨日から通信はすべて途絶えている。

北條、館山、那古、船形方面は全部倒潰した。特に館山、船形方面は大火事があったようだ。神戸村は倒潰戸数多く特に洲宮は亀裂や陥没が著しい様子であった。切割ならびに根本方面ががけ崩れのために本村を通る県道は車・馬とも往来が途絶えている。(後略)

「震災記録」(富崎尋常高等小学校、1923)より抜粋



31. 「震災記録」  
(館山市立博物館蔵)

富崎尋常高等小学校(現館山市立富崎小学校)が残した震災記録です。「安房震災誌」によると、人的被害は7人にとどまり、また学校も被害は小さく9月19日より授業を再開しています。

被災者を救った住民の助け合い



32. 配給物の点検  
(館山市立博物館蔵 震災写真集より)

未曾有の被害を出した関東大震災、政府はただちに臨時震災救護事務局を設置し対応をはかりました。また、同時に治安の悪化、流言飛語（デマのこと）などに対処するための戒厳令もしかれました。

千葉県でも、9月25日に君津郡震災復興会が設立されたのを皮切りに、29日には安房郡震災復興会、10月3日には千葉県震災復興会、続いて市原郡震災復興会が立ち上がり、行政的な立場から傷病者の救護、生活物資や建築資材の調達、道路や学校などの復旧にあたりました。

一方で地域住民の献身的な救護活動も被災地の復興の大きな支えになっていました。ここではその事例をいくつか紹介しましょう。

生命の無事なりしは、何よりの幸福なり。一身を犠牲にして萬斛（はかりきれないほど多く）の同情をもって罹災者を救護せよ  
「安房震災誌」（千葉県安房郡役所、1926）より抜粋

これは、甚大な被害を受けた安房郡役所の郡長が「この大地震で多くの犠牲者が出たなか、こうして命が助かったのは何よりの幸福と感謝し、全力を尽くして救護に献身すべし」という内容の文章です。救護にかける熱意と決意が強く感じられます。

実際に、地域住民の自主的な救護活動が行われたことが記録に残っています。旧成東町小川洋家文書に記された「震火災救護状況報告」には、

「消防組青年団が自衛団を組織し、警察の補給に努めた」

「消防組は避難者の救護、交通整理に尽力を注いだ」

「成公館、傘組、弓組、および石川組等が進んで収容所を提供した」

とあり、住民の自主的な救護活動への参加があったことが記されています。そして「町民の厚義心が罹災者を救護したことは、行政にとっても大変喜ばしいことである」とし、復興には地域住民の助け合いの気持ちが重要であることを述べています。

九月二日  
午後四時本県医師団救療班ニ参加スベク本郡ヨリ命ヲ受ケ本町ヨリ仮医師外分会員三名急派セリ 同夜ヨリ消防組青年団ハ自衛団ヲ組織シ要所ノ張番町内ノ警戒等ヲナシ希薄ナル警察力ノ補給ニ努メタリ

九月三日  
総武本線ノ被害鉄橋及線路ハ昼夜復旧ニ努メタル結果本日三時ヨリ開通ノ運ヒニ至リ避難民及救護者ニテ駅頭頗ル殺到ス  
第六部消防組ハ避難者ノ救護及交通整理ニ尽力セラレタリ

(中略)

九月十八日  
罹災避難民救護モ漸ク閑散トナリ必要ヲミトメサル程度ニ至レルヲ以テ救護ヲ廃止セリ以上ヲ要スルニ大震火災ノ急変ニ際シ罹災者ノ救済援護上何等紛擾支障等ナク円満ニ人道ノ大儀ヲ十分發揮シ得タルハ町民諸君ノ熱烈ナル同情心、例令ハ成公館、傘組、弓組、及石川組等力進ンテ収容所ニ提供サレタル如キ軍人会、青年団、消防組等ガ自発的ニ出動シタルカ如キ、或ハ救護所附近ノ町民諸君カ物質的ニ精神的ニ厚意ヲ向ケラレタルカ如キ、又寄贈衣類ノ予定ヲ著シク突破シタルカ如キ、何レモ深厚ナル町民諸君ノ厚義心ノ発露ニシテ只ニ罹災者ヲ救護シタルノミナラズ自治体ノ発展上欣慶(喜ばしいこと)ニ堪エサルナリ、……  
(後略)

「千葉県の歴史 資料編近現代8」（千葉県史料研究財団、2003）に掲載の「震火災救護状況報告」より抜粋





33. 食料配給の様子  
(館山市立博物館蔵 震災写真集より)



34. 学校がなくなっても勉強に励む子どもたち  
(館山市立博物館蔵 震災写真集より)  
学校が倒潰したため、野天で授業がおこなわれました。



35. 道路補修作業の様子  
(館山市立博物館蔵 震災写真集より)  
現在のように大型重機がない当時は、ほとんど人力に頼って復旧工事が行われました。



## 房州うちわと関東大震災

房州うちわは、館山市や南房総市で作られ、京都の「京うちわ」、香川県の「丸亀うちわ」とならび日本を代表する3大うちわに並び称されています。その房州うちわの発展が関東大震災と深いかわりがあったという話です。

関東地方にうちわが作られるようになったのは江戸時代の天明年間(1781~1788)といわれていますが、材料となる笹竹(篠竹)は房州から取り寄せられたそうです。

房州うちわは、大正7年(1918)刊行の『房総町村と人物』によると、明治17年頃那古町(館山市那古)で岩城惣五郎が東京からうちわ職人を呼び寄せてうちわ骨を作ったのが始まりといわれています。

この房州うちわの生産は、皮肉なことに関東地震をきっかけに生産が拡大されました。なぜだと思いますか？

その理由は、関東大震災によって東京のうちわ問屋が焼け出されてしまい、竹の産地に近い船形町(館山市船形)に移住し、生産を始めたからだそうです。うちわ生産は漁師の留守を預かるおかみさんたちの手内職として歓迎され、当時は年間800万本も生産されていたそうです。平成15年に千葉県で初めて、経済産業大臣指定伝統的工芸品として認定されました。今では年間約100万本の生産量となりましたが、実用品としてよりもむしろインテリアとして好まれているようです。



36. 日本の3大うちわのひとつ「房州うちわ」

参考：千葉県教育委員会ホームページ  
<http://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/bunkazai/catalog/22bousyuuutiwa.html>

# コラム 大震災と耐震設計

## 関東大震災と耐震基準の誕生

関東大震災が発生する以前、明治から大正にかけて東京の丸の内や銀座では、工期の短縮、経済性を重視した近代的な建物と、日本で独自に耐震設計された歌舞伎座や日本興業銀行などの耐震構造の建物が混在していました。関東地震は、これらの建物の耐震性能を試すことになってしまいました。その結果、耐震性よりも経済性を優先して建てられた丸の内ビルや日本郵船ビルは破壊し、日本式の耐震構造設計がなされた建築物は無事だったのです。

関東大震災の建物被害により耐震設計の重要性が見直され、地震の翌年に市街地建築物法において構造強度規定の大改正が行われました。世界で初めて法による地震に対する規定が誕生したのです。それから大地震の際などに耐震基準が見直され発展してきました。特に、1981年（昭和56年）に新耐震設計基準が導入され、耐震基準の目標と構造計算方法の大改正が行われました。そしてその14年後、関東大震災以来の大災害となった阪神・淡路大震災が発生したのです。



37. 地震で破壊した日本郵船ビル  
写真提供：国立科学博物館



38. 耐震設計がなされた日本興業銀行  
写真提供：日本建築学会

## 阪神・淡路大震災と耐震化の進展

### 阪神・淡路大震災

1995年兵庫県南部地震によって引き起こされた関東大震災以来の大きな地震災害です。

地震の発生日時：1995年1月17日5時17分

震源：淡路島野島断層（六甲・淡路島断層帯）

地震の規模：マグニチュード7.3

最大震度：神戸市、西宮市、芦屋市などで震度7

被害の状況：死者6,400人以上、重軽傷者43,000人以上、ライフライン、通信網、交通網が壊滅状態

阪神・淡路大震災で亡くなった方の8割以上は倒れた建物による圧死や窒息死でした。倒壊した建物の多くは新耐震設計基準が導入された1981年（昭和56年）以前の建築物でした。そのことから、政府は古い建築物の耐震改修を行って地震に強い建物を造るための耐震改修促進法を制定し、平成7年12月に施行しました。

この法律にもとづき、千葉県では『千葉県耐震改修促進計画』を策定し、普及啓発、耐震診断・耐震改修補助事業の実施、技術者の養成等に取り組んでいます。また、『県有建築物の耐震化整備プログラム』により、防災上重要な建築物である復旧拠点施設や救援・救護施設を優先的に整備するといった方針を定め取組みを進めています。



### 39. 建物が倒壊し廃墟と化した神戸市市街

倒壊した建物の多くは、新耐震設計基準が導入される以前に建てられたものでした。

阪神大震災を記録しつづける会ホームページ  
<http://www.npo.co.jp/hanshin/> より引用

### 【阪神・淡路大震災の体験談より】

幼稚園ぐらいの女の子と、十二歳ぐらいの兄妹が公園でじっと座っているのを、

「何しているの」と聞くと、「あのね、家がこわれてお母さんが死んでね、お父さんがけがをして病院に行ったから、おばあちゃんの所に行くねん」と目に一杯涙をためて言いました。たまたま持っていたチョコレートを出して、「食べる？」と聞くと、「うん。ありがとう」と言ったあと泣き出してしまいました。

あの幼い兄妹、あれからどうしたでしょう。

歴史に残るようなあの大地震のあと、家の下じきになって苦しみながら死んでいった人、

「助けて、あついよ、あついよ」と叫びながら炎にのまれて黒こげになった子供、また何十年も生きてきた最後に、避難所で、寒さと飢えのために衰弱して、「お世話になりました。ありがとう」

と言い残して息を引きとった老人。この形容し難い悲しみや怒りの気持ちは、いったいどこにぶつけたらいいのでしょうか。

阪神大震災を記録しつづける会ホームページ  
<http://www.npo.co.jp/hanshin/> より引用